2024 年度　ご挨拶

Last quarter に向けて

（２０２４年度　歯科心身医療科メンバー）

2007 年の着任時は医科歯科大学（当時）から 24 年間も頂いたのに、もうその３／４を使ってしまった計算になります。残りの 6/24=1/4 すなわち last quarter をどう走り切るか？が切実な課題となってきました。あと２０００日余りということです。

自分は一生かけて、何が残せるのか？

自分は何を成した？
何を残し、何を奪った？
誰を必要とし、誰に必要とされたか？

自問自答を繰り返す今日この頃です（上記は「ミカエルの鼓動」p528 のパクリ(-_-;)です）。

実は最近は、こんなのでも論文になるのかぁといったデータが出版されています。

Lv K, Lu Y, Shen C, Yao Y, Chen T, Yao H. Studies on Burning Mouth Syndrome in the Past 20 Years: A Bibliometric and Visualised Analysis. Int Dent J. 2024 Nov 22:S0020-6539(24)01547-

8. doi: 10.1016/j.identj.2024.09.034. Epub ahead of print. PMID: 39580355.

舌痛症の研究論文がどこの誰から出されているかをまとめた論文ですが、“Toyofuku Akira is the most active author. “などと Abstract に書かれると、何やら恥ずかしい様な嬉しいような気分になります。高校生の時に模擬試験で成績優秀者の欄に名前を載せられた気分に近いように思います（今はそんなことしないんでしょうけど)。もちろん院生や歴代スタッフたちがこの 18 年間に頑張ってくれたお陰です。

研究面では着任前には思いもよらない成果をあげたのでは、と自己満足しています。

藤沢秀行先生の碑＠小野照崎神社

一方で、「歯科心身医学の全国展開」と「後継者の育成」と使命を帯びて上京したはずだったのですが、こちらは一定の成果はあげたとは思いますが、まだまだ安心というには程遠く、残りの年月でどこまで達成できるか、やや心許ない気もします。

どうも僕は「教育」とか「指導」に向いていない、とつくづく思います。「教えて待つ」ということがとても苦手なようなのです。**「大器をつくるには、いそぐべからずこと」**とは、故郷の大先達、吉田松陰先生の言葉ですが、すぐ「なんでこれもできんとや」と思ってしまいがちな僕にはなかなか実践が難しいのです（口に出したら、今時パワハラ認定ですね)。

従来、歯学教育は徒弟制度的な側面が未だに根強いのですが、どちらかというと「見せて」「させる」教育が多い様に思います。我が国では、ほとんどの国立大歯学部は医学部口腔外科から発展・独立した歴史があります。一応外科系ということもあり、手技の伝授においては指導医が「手を出すのをどこまで我慢できるか」が肝要だと思います。

教えられる側に任せっきりでは患者さんに危害が加わりますし（未熟な技量で歯を削りすぎたり・・・、といった場面がわかりやすい例かと思います)、といって、さっさと取り上げて指導医が処置を済ませてしまうと後進はいつまでも独り立ちできません。特に我々の心身医療は、見ただけではわかりにくい処方の勘所や心理的取り扱いを旨としますので、特有の難しさを感じてきました。

深町建先生ですら、“心理療法”を伝えることの難しさを書き遺されています（「摂食異常症の治療」、p126－129)。**「心理的なものを対象とする場合、公式化されたもの、共有性の部分の割合が多くなればなるほど、それを通して得られる情報量は貧困化するという矛盾を内包している」**と。心身医学的治療の中核部分こそ伝達困難だと。とうにわかりきったつもりではあったのですが、実際はもっともっと深い意味があったことを痛感しています。

「下手に科学的に伝えようとするから旨くいかないであって、むしろ将棋や碁のさし手の伝授になぞらえた方が良いのではないか」「心理療法が科学的だとか何とかいっているけれども、所詮それは“職人芸”」「やはり年期のいった“棟梁”の手際の良さをみ、聞きしながら盗むしかない。教えられてではなく、盗むから、盗むという積極性の故にその人の技法として身につき、育っていく」（前掲）

忸怩たる想いに駆られた３年間でした。コロナ騒ぎも終わり、臨床も研究も、もっといけるはず、と。ただ**「やはり５年の年期を積めば、５年だけの臨床経験が生かされてその人の技法として成長するものでなければ、その教育環境の何処かが間違っていると言わなければなりません」**（前掲）何度も引用しながら自戒・自省する言葉です。優れた臨床医、すなわち、その患者さんに最善の医療を提供できる歯科医師を育成することこそが目標だったはずです。

患者さんが治ったら嬉しい
治った患者さんが一人でも多くなると嬉しい
それらの臨床データをまとめた論文が出たら嬉しい

心身医学では、臨床を核とした一連の時系列の中に教育と研究があるのでは、と考えています。元々難しいことに挑んでいたのだと腰を据え直すしかない、と最終章への決意を新たにしたところです。

無限に続く芸の道は厳しいが
ひたむきに歩むものは幸せだ

人間を高め、力をつけよ
自分にしか打てない碁を探求せよ

（碑に刻まれた藤沢秀行先生のお言葉です。）

「東京医科歯科大学」の表示が書き換えられました↑

「科学大」になって

2024 年 10 月に本学は東京工業大学と統合され、東京科学大になったことは前回お書きしました。医工連携などと威勢のいい空語が飛び交っていますが、国立大学の統廃合は市場に丸投げということになってよいのでしょうか？僕に関する限り、これに対する答えは完全に否です。東大や京大など他の旧帝大、あるいは慶応大など名門私立大でも実現困難なことが今頃になって合併したからと言ってそう易々と達成できるとは思えません。どんなに美辞麗句で取り繕おうと行き詰まりによる不承不承の所作であり、合併した地銀や企業と同様、失われたブランド力を復活させるのは非常に困難では、とみています。むしろ昨今の厳しい医療情勢から、附属病院や医療系学部は本学にとってただのお荷物と化すかも知れません。おそらくこの 5 年内に、多くの病院は機能縮小・集約、統合や廃業を迫られることになると予想されています。当院も例外ではありません。

今後、10 年、20 年間に首都圏の歯科医療の需要がどう変化していくかは、人口統計などを見れば明らかでしょう。当該地域においてどんな医療機能がどれくらい必要か、あるいはどんな医療機能を残していけばいいのかも、冷静に考えればわかるはずです。にもかかわらず、どこでもやってる自費診療の充実とか、もっと多くの患者さんを診ろとか、みみっちい保険点数の回収ばかりに焦点を絞った掛け声が相変わらず頻出してます。歯科界をリード

すべき立場の当院が、日本の歯科医療需要の現状や、特定機能病院の意味と国が進めてきた「地域医療構想」を全く理解していないためとも思えます。

みんなが診たがる患者さんの争奪戦に参入するのではなく、当院が「あそこがないと困る」病院であり続ける必要があると思います。しかし、各種病院会議で強く求められているのが、「稼ぐ力と医療の質の両立」。特に「稼ぎ」。品のない言葉ですが、昨今の医療情勢の切実な問題をついています。確かに持続的に最善の医療を提供するためには、良い病院経営は必須です。「稼働額」を毎月突き付けられては、一生懸命治療をやればやるほど赤字不採算になる患者さんには手を出したくないのは人情です。といって、儲かることだけしようとすると「民業の圧迫」の謗りは避けられません（特に歯科は）。

楽を求めて自分がやりたいことだけやろうとしても駄目なのでは、と思います。大学病院でしかできない高度歯科医療と採算性の確保を両立させながらベストだと信じる医療の提供を維持するのは非常に困難な道です。手段に溺れて存在意義を見失っては何もなりません。ご開業の先生方と上手に役割分担するしかないはずなのですが、どうも機能しません。

歯科でも研修が必須となった訪問歯科診療なども手付かずのままといって過言ではなく、いつまで頑迷固陋な真似をしてるのかな、と思ったりします。

医療には、いたわりの心がなければいけない。
いたわりとは、他人の痛みを感じること。

第 40 回日本歯科心身医学会の準備

恩師の都温彦先生は、1997 年に以下の様なことを書き遺されています。

「心身医学が対象とする分野は厳密な定義や枠組みがあるものではなく，人間が係わり合う心理・社会的・身体的問題を含めた広い全人的領域を含んでいる。」「心身症とは鑑別しなければならないので精神医学的知識も必要であり， 鑑別診断を行うためには医学の各科と交流できる歯科医師でありたい。」「私達，歯科医療に携わる者にとって，歯科患者の needs や心が読める歯科医師が求められている時代である。」

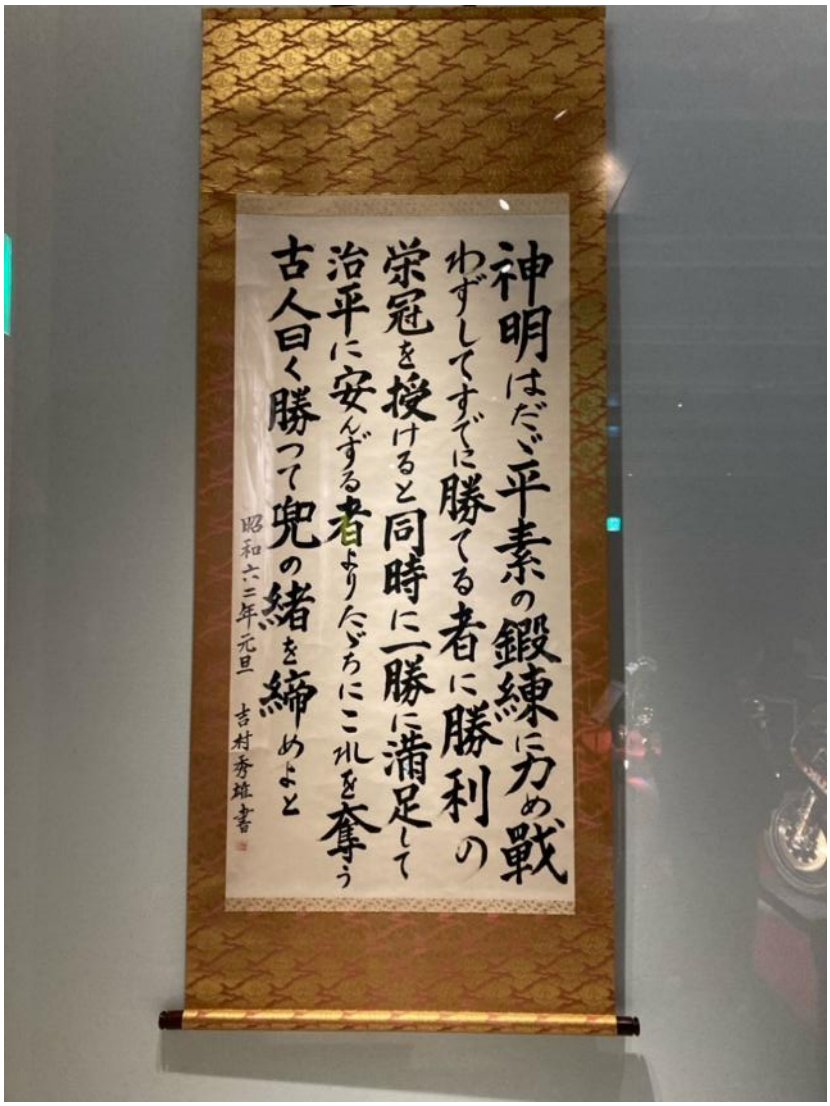
「歯科心身医学は歯科医学にとって特殊な分野として離れたものではなく，それぞれの歯科分野において普遍的に求められる存在である。既存の歯科医療に受け入れられる学問として発展していくことが大事であると思う。」（日本歯科心身医学会雑誌第 12 巻　巻頭言）

この学会も 2025 年には 40 周年を迎え、当分野の OB である吉川達也先生（ラクシア銀座歯科クリニック）が記念大会の会長を務めます。「**温かな知性**」をテーマに、僕たちも下働きに精を出し鋭意準備中です。

国家試験にも出題されるようになったせいもあるのか、歯科心身症の「定義」とか「分類」を細かく規定したがる人が後を断ちません。が、治療に結び付かない診断基準や病型分類に如何程の価値があるのでしょう。あえてそうはしていない先人の叡智に想いを馳せるべきだと思います。そもそも「**控訴主義的・補集合的な成り立つ概念に、自律的・積極的な定義**

を与える試みが全くの無駄」（「北原先生の痛み塾」第 158 回）なのです。

悪くいうと大雑把、良く言えば鷹揚。ゆるい枠組みは対応できる幅が広いということです。



学問は、いつの時代だって変化との戦いだと思います。刻々と変わる情勢にいちいち合わせていけば理想的ですが、現実にはそうはいかないものです。ないものを欲しがっても天から降ってくるわけでもありませんから、今あるものでなんとかするしかない。今ある武器を最大限に使う。この状況は燃えるしかないでしょう。

先人の目指したものをどこまで実現できたのか、足りないもののためにこれからは何をすべきか、学会も不惑の良い節目になりそうです。

（2023 年 5 月、白木原ベース　サイドストーリー@大野城心のふるさと館にて）

痛恨の敗戦から 20 年

丁度 20 年前の今頃、恩師が定年を迎え、教室の後継者争いに駆り出されました。正直、もうちょっと時間が欲しかったのですが、それなりに準備もしていたつもりでした。予想外のことに地方私立大の零細教室に 8 人もの応募者が集まったそうです。選考委員会ではトップだったそうですが、蓋を開けてみれば、まんまと惨敗。やはり噂通りの伏魔殿（この辺りは大塚篤司教授の「白い巨塔が真っ黒だった件」に大いに首肯します）。全てを否定された様に感じたものです。今までの自分と生き方そのものまで。悪いことは続くもので、それまで随分応援して頂いた、藤野博先生（母校歯学部の開祖）が白十字病院でご逝去されたのがこの年の秋です。

心身医学なんかやめて、病院歯科で有病者歯科専門でやっていけばいいじゃないか。所詮、身の丈に合わない夢だったのだと、自己否定の毎日でした。逆に「天神で自費メインで開業しろ、俺たちが紹介するから」などと敬愛する大先輩から言われたりすると、自惚れてその気になったり、心は散り散りに乱れていました(この頃、初めて「これで食っていけるか？」と真面目に心身医療経営のことを考え始めました)。

つい弱音を吐いた時、恩師から「あんたは、もうちょっと aggressive な生き方をするかと思うとった」と喝を入れられましたが、萎えた心はそう簡単に奮い立つことはありませんでした。残念な政治が絡んでいた、と後から教えて下さる教職員の方々もおられたのですが、結果が変わるわけでもありません。教授選のプレゼンの出来も超いまいちだったこともあり、やはり当時の僕には**何かが決定的に欠けていた**、と今でも思っています。

教授選の前後でころりと態度が変わる人々がいたり、変わらぬ友情に感謝の言葉もなかったり、先輩や家族の入院があったり、いろんなことも経験しながら寄る辺ない日々でした。(折しも世間ではスターウォーズのエピソードⅢが大ヒット。業火に焼かれるアナキンの想いが身に染みる思いがしました)

そんなある日のこと、外勤先の外来にトボトボと向かっておりましたら、待合のベンチからパッと立ち上がって一礼される一人のご婦人がおられました。先日、初診で来られた患者さんでした。本当に心底の謝意を表され、ちょっと戸惑いましたが、どうも前回何気に出した処方が奏功したようなのです。

そこでハッと気がつきました。

この人たちのために、やっているんだ、やってきたんだ、と。

どこを受診しても口の不定愁訴と見做され、行き場を失って困っている人たちのために。神棚に乗りたくて教授選に出たわけではない。似合わない背広着て、はしゃいで会議に向かう輩になりたかった訳ではない。白衣を纏うと落ち着く、現場の人間でありたい・・・。

迷いが断ち切れた気がして程なく、2006 年の秋に熊本大学経由で東京医科歯科大から 1 本の電話が入り、僕の運命は急転直下していくことになります。

ただ前述のように、その後は順風満帆というわけではなく、こちらに来てからも歯科心身医学の全国展開の道もそうたやすいものではありませんでした。後継者候補もぼつぼつと、有望な人材が残ってきたにすぎません。残りの日々で、後進に素晴らしいこと、忘れてはいけない厳しいことを、少しずつ謙虚に伝えていく責務があります。敬愛してやまないポップ吉村のように最後まで常に最前線、戦場の第一線に立って現場指揮する人間でありたい、と今でもそう思っています。

思索生知

世の中はそうそう思うようにはならないものですが、それでも何でも成り行き任せにすることを潔しとも思いません。先達の祖述をしているだけなのですが、前段には相応の敬意を払いながら精々自分の役割を果たして、残りを後世に託そうと思います。

神は我を見捨てず、
ふたたび剣をとりて・・・

戦え、とのたもうた。

（「ふたり鷹」文庫版 11 巻）

（2025 年 4 月 7 日　文責：豊福）